

日本人の話す英語はグローバルイングリッシュになりうるのか？

松家鮎美, 安藤義久, 山中マーガレット

岐阜女子大学 文化創造学部

(平成27年11月25日受理)

Can Japlish be one of the many Global Englishes?

Department of Cultural Development

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

Ayumi Matsuka, Yoshihisa Ando, Margaret Yamanaka

(Received November 25th, 2015)

要 旨

In this paper, the authors look at the topic of World Englishes, and ponder as to whether Japlish can be included into this vast group. Globalization and the role of English in the Japanese curriculum is examined so as to learn why Japlish has thus far not been perpetrated by the population. A class survey reiterates such feelings of inadequacy. However, as an in-class exercise shows, knowledge of the many varieties of English instills confidence in the learner and allows them to focus on communication, which is, of course, the object of learning a foreign tongue.

1. グローバルな英語からグローバルな人材へ

「グローバル化」という言葉が使われるようになって久しいが、それ以前は「国際化」という言葉が多く使われていた。この2語は、グローバル社会、国際社会というような言葉のとの関連で使われるが、その意味は多少異なる。国際化とは国の枠組みを前提とした国家間のあり方(宮脇, 2001)を指し、基準になっているのは1つ1つの国である。さらに、その国々の集合体が国際社会だと定義される。一方、グローバルは、既に個々の国の集

まりではなく、国家の枠組みを取り払い、最初から地球という1つの集合体で見ている点にある(宮脇, 2001)。経済産業省のグローバル人材育成推進会議では、グローバル人材の定義を語学力・コミュニケーション能力、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティを挙げている。先の「語学力・コミュニケーション能力」に関しては誰もが話せる共通言語として英語でのコミュニケーション能力が求められ、また世界中でもその能力を備えた人々の人口が増えている。実際世界で母国語として

最も話されている言語は、中国語だが、母語話者以外の「話し手」の数を加えると、大差をもってその順位が入れ替わり(神谷, 2008), 英語の話者が多くなる。このような理由で、多くの企業でも英語の語学力を求める声がこれまで以上に高まっている。

2. 母国語, 公用語, 外国語としての英語

2.1 誰の英語

英語と言えば、イギリスやアメリカという国名が頭に浮かぶであろう。しかし、全世界を調べてみると101カ国で33,500万人が英語の話者である。¹

Braj Kachru (2006) は英語を「三つの輪」に例えている。中心には母国語として英語を話すグループ。この Inner Circle には、USA, UK, カナダ, オーストラリア, 南アフリカ, アイルランド, ニュージーランド(英語話者人口による順番)がある。その外にある Outer Circle には、例えば、シンガポール, インド, パキスタン, マレーシア, ナイジェリアなど英語を公用語とする国々がある。さらに一番外にあるのは Expanding Circle と言い、ブラジル, イタリア, 中国, 日本英語を外国語として学ぶ国々が含まれる。

今日、世界中の様々な国に英語話者が増加する中、シンガポールには Singlish, 韓国には Konglish がある。そこで、本稿では、Japlish を日本人学習者がどのように感じているのか、また、外国語教育の中で、Japlish をどのように考えるべきかを考察する。

2.2 日本人と英語教育

近い将来、日本人の多くは義務教育では小学校の高学年から英語を現在のような外国語活動の一部としてでなく教科として英語を学

ぶようになる。小学生のうちは、歌やゲームを通じて、英語の基本的な単語や表現を理解したり簡単な会話が出来ようよう勉強する。また、現在、中学校の英語教育では、リスニング, 文法, 長文読解などが授業に入り、さらに高校では、大学入試に必要な高度な英語が教えられている。しかしながら、「コミュニケーション活動としての英語」という概念を文部科学省が掲げているにもかかわらず、一向に日本人の英語力は上がらないし、鳥飼(2011)によれば、日本人の英語力はこの20年間下がりに続けているという。その、原因は何であるのかを考えたい。

白井恭弘(2004)によれば、日本人が英語ができない理由は大きく三つあると言う。第一に、習得の目標となる言語と、母国語である日本語との言語間の距離が離れているということである。言語間の距離とは、目標言語と母国語が系統的に近しいか遠いかを表す語である。日本人の母語である日本語はウラル・アルタイ語に属し、インド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に属する英語では、全く異なる語族に属しているため学習の難易度が上がるということだ。

第二に、英語学習の動機づけの弱さは、日本では英語が使えなくても生活には困らないため、学習する動機が弱くなる。一方、シンガポールやインドなどでは、英語が公用語として用いられているため、学校教育や実社会で英語を使用することが必須である。そのため、いやおうなしに英語を習得せざるを得ない。白井によれば、言語学習の動機づけは、一般的に二つに分けられる。一つは、外国のことをよく知りたいという統合的動機付けである。もう一つは、受験や仕事で使うというような、道具的動機づけである。しかしながら、日本人は、普段の生活の中で、英語を日常生活の中で使う動機はほとんど見出せない

い。また、鈴木孝夫(1990)は、日本の西洋化が進むにつれて外国語の使用の動機付けが弱くなってしまったと指摘している。

結局、日本人が学んでいる英語の多くは受験のための英語である。始めて実用的な英語を使うようになるのは、社会人になってからで、これはごく一部のみにしか成り立たない。

更に、日本人の英語を学ぶ姿勢にも問題がある。それは、間違えた英語を使うことを日本人が極端に嫌うことである。その傾向は特に欧米人と話しているときに顕著であるように見える。文法的な誤りの無い「正しい」英語を話さなければいけないと思いが強いのでコミュニケーションが出来なくなる日本人は多いと思われる。これは、文法中心の日本の英語教育もたらず一つの結末でもあるかもしれない。英語にかかわらず言語というものはコミュニケーションの道具であるので、使えなければ全く意味が無い。

3. Japlish に対する英語学習者の思い

著者の一人は、平成27年度後期、岐阜女子大学2年次の観光関連のある英語の授業の中で、受講学生22名を対象にグローバルイングリッシュについてアンケート調査を行った。

今日はグローバル化が進み、インターネット人口が増える中、多くの国で英語が学ばれているが、調査に協力した学生でも「今の時代、英語くらい話せないといけないと思う」に対して、「思う」「まあまあ思う」と答えた学生がほとんどであった。ただ、日本人の英語運用能力の低さを指摘する声は多く、実際、ほとんどの学生が、「英語を話すことを躊躇するか？」との問いには「躊躇する」「まあまあ躊躇する」と答えた。その理由には発音や文法が挙げられていたが、同時に、「伝わら

なかったら嫌だから」を選ぶ学生が最も多くいた。そもそも何て言えば良いのか分からないという声もあり、「文法も発音もお手上げだ」と言うコメントを加えた学生もいた。また発音に関しては、日本人訛りの発音は授業中日本人同士で英会話の練習をするなら全く不便を感じないが、アルバイトで外国人と接する機会では、発音の善し悪しを気にすると声が上がった。日本人が相手なら英語を話す際に、物怖じせずに会話の練習が出来るが、実際に外国人を目の前にすると、突然発音が気になるという。今回の調査でも、日本人の英語が Japlish の発音であることが「気になる」「まあまあ気になる」と答えた学生も多くいた。

4. コミュニケーション能力を高める授業の実践

この授業では、まず、海外で話されている英語の多様性を認識できるよう学生は、Kachru の「三つの輪」について学び、さらに、各サークルに属する国の英語の録音データを聞いた。Inner Circle は、アメリカ及びイギリス、Outer Circle からは、シンガポールとインド、Expanding Circle は、例としてイタリア人の英語を聞かせ、それぞれの国が独特の発音やアクセントを持っていることについて理解した。その後、受講生には第3節で指摘した、日本人が英語の発音する際に抱く意識について調査を行った。その質問の中には、「外国人にも十分訛りがあると思うか」という質問事項があったが、それに対して「思う」「まあまあ思う」と答えた受講生がほとんどだった。また「日本人は訛りや発音について過剰に気にする必要はないか」については、学生のほとんどが「必要ない」と答え、日本人の話す Japlish もグローバルイング

リッシュの一つに成り得るという結果が出た。

コミュニケーションとは、相手の意見を聞くこと、自分の意思を伝えることであり、そのために相手に伝わりやすい発音を心がけることは大切だが、それが最重要事項ではない。授業ではその点について確認した後に実践的に英会話の練習を行った。テーマは「次の休暇に旅行したい場所について」コミュニケーションの基本に従い、相手の意見を聞きながら、自分も納得した上で2人の結論を導きだしていくよう指導を行った。学生がお互い行きたい場所が異なる中、いかに自分の行きたい場所を相手に伝えることができるか、また相手の行きたい場所を聞き、なぜそこへ行きたいかを自分が納得するまで尋ねることが会話の目的であった。尋ねられた側はその国の観光地や特産物を用い、一緒にその国へ行けるよう説得しようとする。そうした繰り返しの通じ、最終的にお互いの主張の妥協点を見つけることを、この会話の練習目的とした。アクティビティー後、学生に意見を聞いたところ、作業の中では、文法や発音よりもコミュニケーションを取ることの重要性を学んだという声が上がった。下記の会話例は当日の会話練習に使用したものである。全員で読みの練習をした後、下線部には個々の好きな言葉を入れペアで会話練習を行った。

A: I want to go to Fiji for our next vacation.

B: Oh yeah? What do you want to do there?

A: I want to go scuba diving.

B: Sounds nice, but how about New York?

A: What do you want to do there?

B: I want to see some musicals.

A: Uh-huh, what else do you want to do there?

B: I want to visit the Statue of Liberty.

A: I see, but I would like to stay at the beach.

B: Okay, then we can visit Staten Island, too. We

can take the ferry from Manhattan and rent a jet ski. It is going to be exciting.

A: All right, let's go to New York then.

5. 学習を振り返り

今までの日本における英語教育では、英語といえば、アメリカ人やイギリス人のようなネイティブが使う言語だというイメージが強かった。しかし、上記の学習を通して、学生は今や世界中でかなりの人が日常的に英語を使っていることに気がついたが、また、これまで自分の話す英語では通じないのではと心配していた生徒も自信を取り戻せた感もあった。それは、Outer Circle や Expanding Circle の人々が自分たち独自の発音で日常会話に挑戦していることや、英語を話しているのにも関わらず、母国語の表現を英語の中に取り入れながら会話を行っていることから、自分たちも、もっと気楽に英語を話せば良いのだと考え始めた学生も少なくなかった。

日本人は、しばしばカタカナ語の影響を受けて発音してしまうことがあるため、学習者が自らの英語力に自信を持てなくなる学生が多い中、Global Englishes の存在について知ったことで、本来のコミュニケーションの目的に近付き、英語を自由に話す動機付けできたとと言える。

脚注

1. Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.). 2015. *Ethnologue: Languages of the World, Eighteenth edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <<http://www.ethnologue.com>.> 2015年11月11日閲覧

参考文献

Kachru, Braj B., Yamuna Kachru and Cecil L. Nelson (eds). (2006) *The Handbook of World Englishes*. Blackwell Publishing, Online version: <http://www.blackwellreference.com/public/book.html?id=g_9781405111850_9781405111850>. 2015年11月11日閲覧

神谷雅仁. 2008. 日本人は誰の英語を学ぶべきか。—World Englishes という視点からの英語教育—. Sophia Junior College Faculty Journal. <http://ci.nii.ac.jp/els/110007093298.pdf?id=ART_0009028416&type=pdf&lang=en&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1447753458&cp=>. 2015年11月10日閲覧

鈴木孝夫. 1990. 日本語と外国語 (岩波新書).

白井恭弘. 2004. 外国語学習に成功する人, しない人—第二言語習得論への招待 (岩波科学ライブラリー). 岩波書店

鳥飼久美子. 2011. 国際共通語としての英語 (講談社新書). 講談社

宮脇淳. 2001. グローバル化と国際化, PHP 政策研究レポート. <http://research.php.co.jp/seisaku/report/01-53_paradigm.pdf>. 2015年11月10日閲覧



資料1 グローバルイングリッシュに関するアンケート



資料2 会話見本

